

「行動する保守」の論理（3）

——在特会から学んだγ氏の場合——

樋口直人

（徳島大学総合科学部）

Logics of the ‘Aggressive Conservative’ Movement (3)

The Case of Mr. γ

HIGUCHI Naoto

University of Tokushima

1. 問題の所在

西欧の極右政党や極右の支持者に関する研究は、1990年代以降急速に増加し、政党および政党支持の研究のなかでもっともポピュラーな分野の1つとなった。だが、これらは世論調査一般や極右政党の政策綱領といったデータに基づいており、極右それ自体にアプローチした実証研究は少ない¹。これは政党のみならず運動についても同様であり、極右の活動家に直接聞き取りした研究としては、管見の限り本稿で引用したものがみられる程度である（Blee 2002, 2007; Berezin 2007; Kimmel 2007; Klandermans and Mayer 2006; Linden and Klandermans 2007; Sehgal 2007; Virchow 2007）²。日本でも、稚拙だが貴重な学部の卒業論文をもとにした小熊・上野（2003）とジャーナリストのルポである安田（2010, 2011）が存在するのみである。

欧米で極右活動家に関する調査が少ないのは、暴力を日常的に用いることが多いため、危険を伴うという背景があるという（Blee 2007）。日本の場合、排外主義団体は暴力集団としての性格を持

つわけではないから、研究者がアプローチできない根拠は薄弱である。それにもかかわらず、そして若年層を中心に在特会に関心を持つ研究者は多い状況があるのに、実証的にアプローチする日本の研究者は存在しない³。2011年の社会学会の年次大会で組まれたテーマセッションでは、在特会にアプローチするジャーナリストの安田浩一氏をゲストスピーカーに招いて現状報告を聞いたという。それ以外の研究者は、サーベイデータの解析や在日コリアン側の反応を報告しており、要するに排外主義運動そのものにアプローチした者は皆無だった。直接アプローチせず周囲をうろろし、一次情報はジャーナリストに頼る。フィールド調査を大きな柱とする社会学者として恥ずべき光景だと筆者は考えるが、企画者はそうした意識を持っていないようである。

フィールド調査は、排外主義運動の活動家に対する硬直した見方から脱し、運動の盛衰を理解するうえで不可欠である。西欧に限られたエスノグラフィからも、参加に至るきっかけや動機のジェンダーによる違い、運動のタイプと参加者の違いなどさまざまな側面に光が当てられてきた。筆者自身の第1の関心は、「東アジア」という構造的

¹ ただし、米国の人種主義・白人至上主義団体に関するフィールド調査には一定の蓄積がある。これについては、Blee（2002）を参照。

² このうち、ライフヒストリー調査であることを前提に、欧州各国の比較研究を行った Klandermans and Mayer（2006）が調査の設計に際して役立った。

³ 米国を拠点とする研究者グループが、筆者と同時期に在特会などの排外主義運動を調査しており、筆者が知る限りではそのグループ以外フィールド調査をしていない。

要因と「排外主義」の関係を知ることにあるが、社会運動論的な関心も同時に持っている。後者に関していえば、在特会が民族派の一部から学習する形で設立され、認知的には歴史修正主義からも引継ぎ、やがて自前の動員の基盤を築いてきた。その意味で、街宣右翼ではない右派運動が在特会に及ぼした影響は大きく、本稿で紹介するY氏（40歳男性）もそうした影響を与えた1人といっ
てよい。Y氏に対しては2011年5月22日に聞き取りを行っており、以下ではその記録を辿っていく。

2. 政治への関心

高校生の時にはたまたま政治経済の授業をとって、点数取るために勉強していたら「割と面白いじゃん、政治の世界」ってところが始まりです。振り返ってみるとそうですね。政治にあんまり興味なかったけど、たまたま授業でとったのがきっかけなのかなという感じはします。

今振り返るとね、やっぱり高校時代って多感な時期じゃないですか。政治的なものかちょっとわからないけどね、活動のベースになっているものが高校時代にあって。たまたま歴史の授業でちょうど俺、茶道をやっていた明智光秀のところがあった、日本史で。お茶の家元が、明智光秀は千利休だったという一子相伝の秘密を暴露したんですね。今までは秘密にしてたけど、これはもうそういう時代じゃないでしょって。歴史学会がどんでん返し喰らって、それは俗説だっていつつぶしにかかって、今、教科書も書き換えられていないけど、家元が言うのなら間違いねえだろうって、それをテスト——論文テストで明智光秀について書いたんです。千利休だったと。こうして歴史というものは捏造されているもので、これが日本でも行われているっていうのは普通にあるだろう、と。「だからまるで私たちが学んでいる歴史というものは無意味に近いと、教科書なんて」って論文で書いて、教科書に載っていないことを書くな、と（教員が）言ったのが多分きっかけになっていると思う。すべての。世の中の仕組みに対する、不条理に対する文句っていうか、それは多分それがきっかけだったんじゃないかなって思いますけどね。

それから高教組がストライキやるって言った時に、それは思想とか関係なく、「いや先生、俺

達は授業料を払っているんだぞ、高教組だか日教組だか知らないけどストライキやって休むんだぞ。俺達金払っているんだから休んだっていいだろう」と。ストライキの日に合わせて授業 boycot するという話で集めたら、行こうぜ行こうぜって話に。まあ、高校生ですからね。朝まで酒飲みながらどんちゃん騒ぎしただけなんですけど。そういうのもすべてそこから多分起源ですね。自分達のちっちゃい気持ちの中での不満とか、不満に対するちっちゃい正義みたいなのを体現するという方向性を持つようになったのは、明らかにその時期です。

ただ、それは小さい政治。結果的にはわがままというかね、遊びただけだったんだろと言われてたらそうなんだろうけど。そこには小さい反骨精神みたいなのがねえ、どこかにあったかな。（筆者とY氏が）同じ年代だからわかると思うけど、あの時、あの高校生の時代って反社会的、社会に対する不満みたいなものがすごいヒットしたり。たとえば尾崎豊とか、小山卓治だったりとかって。あと自分は何なんだっていうのが混沌として、向かっていく敵とか目標がないような時代だったから。あらゆる不満のぶつけどころを探していたのかもしれないですね。

（教員組合から社会党嫌いになることは）ないです。思想とも結びついていない。爺ちゃんっ子だった、爺ちゃんと婆ちゃんのところで育ったんで、高校時代ね。必ず爺ちゃんがお前なんぼ忙しくても仏壇に手を合わせて行けとはいわないんだけど、天皇陛下のお写真があって陛下に挨拶くらいしてけ、という爺ちゃん。自然とこう、天皇陛下というものが学校でも教えられないじゃないですか。だから多分わかんなかった、天皇陛下の御存在自体考えたことなかったのに、爺ちゃんに高校時代お世話になってから、天皇陛下というのは尊敬しなければいけないものなんだ、と毎日刷り込まれていったっていうのが土壌になっていると思いますね。

（選挙権を持って）高校のときは振り返るとそれが政治に関わっていく土壌というかきっかけになったんだろって振り返っているけども、選挙権持った当初ってのはね、大人になった一つの証みたいなくらいな感覚ですよ。だからそこでも政治というものを考えたりとか、候補者のことを考えて投票に行くというよりは、大人になった権

利を行使に行くぐらいのもので、まったくの愚民ですよ、要するに。そんなものに選挙権あげちゃいけないのに、と今思えば思うぐらいの何にも興味もない状態でただ選挙に行っていたってだけです。

面倒くさいとは思わなかったし、投票したやつ、クイズみたいですね。誰が当選するのでしょうか。僕はこの人だと思いますって入れたやつが、いったいどうなるんだろう、そのぐらいのもので。でも、そのノリでいってもね、まったくもって意味がない。それで選挙投票率を上げていったい何がどうなるんだろうっていう。

（投票する特定の政党は）ないですね。投票所に行ってもよくありますけどね、当日ポスター見てどれにするみたいな人結構いるんですよ。この人イケメンとか、そういうノリですよ。人相で決める。名前で決める。何かまじめそうな名前だな、とかそれぐらいなものですよ。本当に選挙権持った当初っていうのは、まったくもって政治に興味があるから行くとかじゃなくて、責任として行っているとかではなくて。大人の一環として行使するのが大人になった気分がする、みたいなそんなまったくもって軽いノリでしたよ。

共産党とかに入れてますよ。今でもたまに入れたりしますけど。潜在的に自民党だって、お前みんな同じだろうっていうのがあったので、当選しないやつに入れて頑張れ頑張れって言ったりとか。共産党を支持しているとかじゃなくて、絶対投票しえない人に入れたりしてます。それは民主主義の否定。学生時代はさっき言ったように、何も考えずに入れてただけですけど。

3. 外国人との接点

（身近に）北朝鮮籍の人はいましたよ。飲み友達で。それが仕事がなくなっちゃって××に行ったのかな、恐らく。行っちゃったんだけど、否定してましたよ、朝鮮学校のあり方とか。朝鮮総連のあり方とか。生まれも育ちも日本人なのに、自分の意思とは関係なく考え方もほぼ日本人ですよ。だけど、1つの絶対に動かしちゃいけない存在が將軍であったりとか、完全に傘下になっている朝鮮総連や朝鮮学校があるお陰で、我々は不幸なことにしかならない。だから俺達人間らしくというか、人として生きていくためには、在日特権というものを朝鮮人の側からぶっ壊さなきゃ

いけないものだと思うけど、それは今できないっていった。圧力が非常に激しくて。でも恐らく、そういう考え方をもっている在日ってほとんどじゃないですかって言ってたね、その飲み友達は。

いなくなっちゃったけど。高校卒業資格もないから就職できないですよ。朝鮮学校卒業したってね、何の資格もないですから。そうすると、同胞の会社にしか入れない。だから、故郷大好きなのに生まれ育ったところを捨てていかなきゃならない。これから朝鮮学校に入っていく人たちも同じ道を歩むから本当に不幸だと思う。それを聞いてからね、ああ在日特権というのは多分なくならないけど、ぶっ壊す運動っていうものを始めて、在日たちがそれ自らに在日特権が自分達の首を絞めてるんだっていうことに気がつくところまでは、やらなきゃならないだろうって思ったね。そいつが××に行くのをきっかけにして。

自分が考えてたよりも、大きい問題だなんて。重要っていったら重要なんだけど、どうでもいいってたらどうでもいいっていう話なんですけど。朝鮮人のなかでも一部の朝鮮人が、利権というか漁っている話で。微々たるものですけど、国民の税金からもらってるよね。それよりももっと不条理なものっていっぱいあるし。許せねえ許せねえっていうけど、別に許してもいいんじゃないのっていうぐらいなものだけど。でもこの運動って展開していかなきゃいけないだろうって思う。

4. 右翼活動へ

《野村秋介との邂逅》

野村秋介という方が、多分あの当時はもう亡くなっていたんですね。何年前だったかちょっと…。で、亡くなった直後ですよ、そんなにたっていない頃に先生の本があって。その数年前から政治にはすごい関心があって、テレビを通じて「朝まで生テレビ」ってのが爆発ヒットしていました。あの時に野村秋介先生というものを知って、ああなんか右翼ってなんかわけわかんなかったのに、ちゃんと国のこととか国民のこととかを真剣に考えて、しかも行動する人が今の時代にもいるんだっていうのがわかって、感じて、それリアルタイムで見てたんですけど。

亡くなってからたまたまその本を、友達のなかで政治の話をよくするように段々になってきて、それで多分右翼的な話をしてたんでしょ、きっと。

恐らくね。で、友達が古本屋から「お前の好きそうな本を持ってきてやったぞ」ってくれたんです。それが野村先生の本で、そこからですね、一気にヒートアップしていったんです。何かしなきゃいかんなど。それが多分ね、行動するっていう風に走っていくきっかけ。

「風の会」というのができたのも知ってたけど、それほど関心はなくて。多分その選挙が終わったくらいから、少しずつ政治——世の中の動向にすごい興味を持つようになって。朝まで生テレビの影響が大きいのかって思いますよね。政治を語るとかね、世の中を語る論議するってのはこんなに面白いもんなんだ、っていうのを・・・田原総一郎に感謝しなきゃいけないね。嫌いですけどね。きっかけ、多分それじゃないですかね。今記憶をよみがえらせていくと。恐らくそれくらいしか思い当たらないですね。

(どうして朝までをみたのか) たまたま夜更かししてやっていた番組がそれだったんだと思いますよ。それまでテレビ、遊ぶほうが楽しくて、テレビほとんど見なかったですから。夜中しかテレビ見れないっていうか、遊びが忙しくて。間違いなく学生時代なんだよね。大学生ですよ、それこそ。浪人して入ってるから、通常でいくと3年になるのかな。1年遅れで入っているから。大学2年生くらいのときじゃないですかね。あんまり覚えてないですけど。多分それが関心を持つきっかけだったと思います。

《維新政党・新風への加入と脱退》

(野村秋介の本で) 感銘を受けて、その当時は結婚したばかりだったのかな・・・いや違うか。離婚しているんですけど、離婚するちょっと前から野村先生の・・・いや、子どもがいなかったからその前かな。ちょっと記憶が定かでないけど、その本を手に入れて野村秋介事務所に電話したんですよ。で、先生の本を読ませていただいて何ができるんだろうと思ったんだけど、自分は右翼団体は嫌いなんですと。今思ったらとんでもないことを野村先生に言ってたな、右翼に右翼が嫌いだってね。若いから怖いものがなかったんですね。で、右翼は嫌いなんですけどどうしたらいいでしょうか、といきなり相談の電話したんです。

で、蜷川先生っていう野村先生のことを継承している先生がいて、「ああそうか、じゃあね、君

が納得するかどうかは後で判断すればいいけど、魚谷哲央という人を絶対に裏切らない男を紹介する」って言って、その当時新風の党代表だった魚谷さんを紹介されて党本部に電話したら、〇〇本部があるからまずそこに電話してごらん、って電話したら「ちょうど1週間後に党のブロック会議があるからそこに来てみなさい」ということになって行って。参議院選挙に出る多分直前だった、半年前とかそのくらいですね。

で、そこでね、選挙に出る党なのに「選挙どうする？」みたいな話してるんですよ。何だこれ？と思って、「初めてきた感想は」と聞かれて「こっちは野村先生のところから来ているのにね、紹介されたところが選挙間近なのにどうやってやる？選挙は、みたいな話をしているから、大人たちが、正直に言って下さいというのでショックでショックでしょうがないです」なんだこれ、って話をしたんです。これが選挙に出る党ですか、来て時間の無駄だったみたいなことを、生意気なことを言ったら、「いやいや、こういうことって言いだしっぺがやるものだ」といきなり党の事務局長にさせられた。

で、選挙の「せ」の字もわからない人間が選挙を切り盛りしなきゃいけない立場になっちゃって、そこから本格的なスタートです。活動といえ。もう選挙の(資料を)読んで、すぐ管理委員会に電話して、すべて初めて俺が入って初めての選挙で、選挙のこと知っている人もほとんど事務局にはなくて、全部手探り状態で参議院選挙を戦ったのがきっかけ。活動の、行動のきっかけですね。

(それが)平成10年。2回戦ったんですけどね、活動していくなかでどんどん矛盾、政党の矛盾とか民主主義に対する矛盾とか、そういうものが段々と肌で感じるようになって。新風はね、どのくらい前かな、途中でやめているんですよ。2回選挙を戦って、次の選挙のちょっと前にやめてるのかな。

新風はあの当初から拉致事件に、救う会の一——まだ救う会という名前がついていない時代で、佐藤卓己先生の時代から取っ掛かりを持っていたんで——活動の1つとして展開していたんで。新風を通して「家族会の人たちが座り込みやるんだけど」っていう話で「行きます」といって。その時は何やってたのかな——花屋さんだったのか

な——多分花屋さんだったんだけど休んで行きました。

あの頃に強烈だったのは、自民党から共産党に及ぶすべての既成政党は、拉致事件は右翼のでっち上げだっていう評価だったんです。だから佐藤先生は苦勞されてたんだけど、家族会の横田さんのお父さんとかと自民党本部の前で座り込みをやったことがあるんですよ。あれ、何で座り込んだのか覚えてないんだけど、多分拉致事件に対する対応が何でやらないんだっていう抗議だった。

で、野中広務が出てきて、励ましてくれるのかと思ったんです。そうしたら、「お前達がいくらイヌのようにギャーギャー騒いでも、拉致被害者なんて帰ってこないんだ」っていなくなったんです。党本部からたまたま出てきて。それで一気に、なんていうかな、政党活動から反体制みたいなものに自分の気持が変わっていく瞬間だったんですよ。拉致問題を通して。

すべてね、嘘、嘘モノじゃないか、政治家ってものは。個人的に悪いやつがいても、国のために働くのが国会議員とすれば、国民の生活を守らなきゃいけないという期待・前提をどこかに置き忘れてしまっている。その一番根っこの部分がないから、民主主義だって成り立っていないし、すべてが嘘モノ、作り物なんだ、これをどうやってぶっ壊そうかと思ってたんで、テロリストみたいな心境でした。民主主義もニセモノ。学生時代の俺の時のように愚民が選ぶから、愚かな政治家が生まれるんだとしたら、この民主主義ってものもニセモノだなど。じゃあ愚民が選ぶ選挙を何百回繰り返しても、よくなるわけじゃないじゃねえか。

じゃあ最終的にはみんなこれ言うとするぐらいに思いつくんですけど、最終的にはテロしかないだろう。テロっていってもいろいろなテロリズムってあるけど、ただ単に殺害するのではなく、テロというものに行き着いて、その行ったテロに対してある一定程度のそれに賛同する意思を表明する体制ができれば、少しは世の中は変わっていくかもしれない、というのを持ち始めたのはその頃。それは今でも変わってないっていうか。

《自前の組織作り》

××会ができたのが、多分（平成）11年——10年くらい前なんです。その頃から、立ち上げ当初から護国神社参拝はやってます。立ち上げのス

タッフの1人として。その頃はまだ新風もやってたはずですね。で、××会ってのは、最初は立ち上げる意思は全然なくて、その時も日本会議とか、西部邁先生の塾だとか、保守系の団体、ああ、歴史教科書を作る会、保守系の団体が流行りみたいにはぼこぼこ表に出てきてた時代で、そこでいろいろな会とかいくと、会う若い——当初若いやつらがいつも会うねって話になって、5月3日の憲法記念日と8月15日、新聞が左翼のオンパレード。当初は、護憲派の集会がどこどこで開かれた、（という）真っ赤っ赤な記事なんですよ。8月15日はその当時から赤紙配ってね、自衛隊反対、憲法守れとかやってたんで、その日も真っ赤っ赤ですよ、新聞紙上は。それで、保守だか右翼だか知らないけど、うちの主張が活字にならないってのはこれ非常な問題だろう、と。多分県民は地元新聞を見て、世の中には護憲派しかいないんだとかね。世の中には自衛隊反対の声しかないんだってというような錯覚を、潜在的に刷り込まれていく土壌が新聞にはあるなど。これを何とか打開しなきゃいけない。それでいろんな団体をお願いにいったんです。是非憲法記念日は自主憲法制定、まあ改憲派じゃないんで自主憲法っていう運動展開を講演会でも何でもいいからやってくれって。改憲でもいいすかって。とにかく護憲ではない集会をやってくれと。8月15日には自衛隊の存在を認める、というか賞賛する、先の戦争は悪であるという戦時体制を打破しようという運動を展開しなければ、まっかつかの状態から脱却できないぞとお願いに行ったら、断られたんですよ。いやあ、うちの団体は人集まらないしね、って。仕方ないから俺達でやるしかないなということになって作ったのが、約10年前の××会。正確に何年前かわからないけど、約10年間毎年5月3日と8月15日は必ずそれは外してない。あと中間にはいろいろな講演会をやってるんですけど。それは今でも続いています。

《ネットでの活動》

ネットってね、有効利用しなきゃって思い始めたのが何年前かわれませんが、□□会というのできて、本当に本当の街宣右翼から主婦まで会員がいたんですよ。多分300名くらいの規模だったんですけど。で、それがあの当時掲示板が非常に流行って、保守とか右翼が発言する場ができた

んです。今まで自分で思っているものを語る場所ができて、掲示板がすごい盛り上がった時期があって。それをツールにしてできたのが□□会。まずこのツールを生かして、地元でも会員募ろうぜってインターネット活動ってのが始まった。そこで地元□□会を××会と同時に立ち上げた。それこそ2ちゃんねるもできたばかり。

で、総会とか行くと今の在特会の構図にすごい似ているんだけど、その頃はパチってやったら（クリックしたら）会員って感じじゃない。名前も□□会って重々しいし、会規もすごいあって。だから遊びで入ってという人は非常に少ないから、濃い300人だったんです。だから行ったら本当に300人近く総会に来るぐらいの。そこで議論とかいうものに磨きをかけていく修行時代みたいな。ネットの掲示板から、対面してぶん殴りあいになったり平気ですくらしいの真剣なもので。そういう時代を経験してて、そこから掲示板が廃れたんですよ。掲示板に書いても意味がない、便所の書き込みじゃないかと下がって。それが収束してって、ネットってもう使えねえなって。ホームページ作るのも大変な時代ですから。ブログっていうものもまだなかったし。

その頃に段々動画になってきて、それをいち早く取り入れたのが——□□会が掲示板をいち早く取り入れて左翼より早く取り入れたけど——動画というツールをいち早く察知して取り入れたのが在特会だから、構図がすごく似ているんですよ。ツールは違うけど。

（トピックは）今考えると、それほど政局に対するものの議論ってあまりなかったです。今考えるとね。何々政権がダメだとか、いけないとかいうのはあんまりなくて、思想を語る場みたいな。俺は国家社会主義がいいと言った。民主主義をありがたく思っていたらそのうち大変なことになるぞ、みたいな意見から、俺みたいに最終的にはテロしかないだろっていう人からね。やっぱり国民の中から保守側の政党政治を作って育てていかなきゃいけないから、新風しかねえなとかね。新風だったら国民受けしないでしょ、100年経っても新風だったら当選しないよという奴がいて。そこが思考する土壌があったってということ。思想性を語る所です。政治より。

ただ、時局ではインターネット上の活動というものはいろいろあって、例えばねえその時から昭

和の日運動というのをやって、要望書を提出してとか、やってはいましたね。あと細かいところでは、朝鮮人がね、新大久保かどっかの駅で人が落ちたのを助けて死んじゃったんですよ。で、あれに朝鮮人だろうが日本人よりも義挙、これは義挙である、日本人は学ばなきゃいけないって言って、そこに顕彰記念碑を役に立てる運動とかをやったりとか。それも実現してますけど。そういう細かいのからいろいろな活動をインターネット上でやり始めた。

インターネット中心の活動は□□会でやって、それで現実的な活動ってのは多分その時はね、保守が外に出て街宣をすることはまったくなかった時代だから、講演会活動をリアルとしてやっていたのは××会。二本立てでやっていた。（講演会では）メインは憲法。自主憲法制定ってのは新風しか言っていなかったもので、改憲派です。8月15日、英霊を顕彰するという日本を中心にして、あとはあいている月に「平成の侍シリーズ」といって政党を支持するところはないけど、中には侍がいるって趣旨で、中川昭一先生を呼んだりとか、西村真悟先生を呼んだりとか、俺達が侍だと感じる政治家を呼んで講演会をするシリーズ。〇〇先生が本を出したときとか、中国批判を展開するときに〇〇先生を呼んだりとか、そういう展開を。

（8月15日には）午前中は遺族会が団体参拝、それを外して午後から。なかなか入れないですよ。遺族会に入り込むってことはね。なんなんでしょうね。壁があるっていうか。特に思想性で動いているわけではないので。遺族というだけなんで、非常に隔たりがあります。遺族会だから話通じるだろうと思ったらね、靖国神社に行かないけど護国神社はうちの爺ちゃんがいるから来るんだって。だから最近じゃないですか、遺族会と一緒に、遺族会のいるところに僕たちが行って、参拝前にミニ講演会をやるって。靖国神社からもらったビデオを遺族会の見てもらったりとかは、ここ何年前からやっているんですけど、それまではまったく別。

（参加者は）新しい歴史教科書を作る会、これがあったんで。あとは西部（邁）先生のところに行って、こういうのがあるんだけど、ピラ配らせてもらったりとか。あと日本会議も。今でもやっているといったら、建国記念日、あの当時ね、1000人くらい来てたんですよ。今多分500名いないん

ですけど、約 1000 人くらいぐわっと来て、そこで配らせてもらって。あとは救う会の活動は新風時代からやっていたから、救う会の人たちとかね。そういうところをお願いして、「やるんで参加してください」って集めて。

5. 在特会での活動

《フリーチベットと在特会との邂逅》

（外国人に対する関心が生れたのは）在特会と出会ってからですよ。あの時だ。サミット、洞爺湖サミットの時に、洞爺湖サミットが始まる 1 年くらい前、1 年もたっていないか、その時はまだ××会やってたのかな・・・やめたんですよ、××会。というのは、全部俺がやってて、何にもやらないし、やらせようと思って何かね、俺がいるんならやってくれるかという人任せなものに代わって行ってしまったんですよ。最初はみんなやって。それでどうするかと思って、「やめるかこれ」って。「つぶしちゃえば」って。もう俺達がやらなくても、今頼みにいったら 8 月 15 日もやってくれる団体恐らくあるし。改憲運動もやってくれる団体あるから、もう存在しなくてもいいんじゃないかねかと。「つぶしまうべ」という話をして、まあつぶす気はなかったんですけど。俺がやめたらさすがにやるだろうということでやめたんです。

それで同時に保守も外に出なきゃいけないな、って思い始めた時期があって。街宣活動ってその時代は民族派しかやっていなかったですから。「保守でもできるんだぞ」っていうことを、「街頭に出ていいんだよ」ってことを体現したくて、それもあって××会をやめて。で、1 人で立ってたんですよ。洞爺湖サミットが決まってから街頭に立ってたんですよ。それは反サミットではなかったんです。サミットをやるなっていうんじゃなくて、どうせやるなら胡錦濤も呼べと。チベット問題、一体どうなってるんだっていうことを追及せよとね。そういう話をして、隣に□□先生（右翼活動家）がいて、右翼がやっている隙間を縫って街宣でやって。

その時にね、フリーチベット運動が起こってきて、それインターネットで 2 ちゃんねるかなんかで募集始めていて、地元でもやるっていう、チベットやるみたいな情報が入って。それを機会にして地元でそういうデモとか、保守みたいなものが

表に出るきっかけになるかもしれないな、といって自分からフリーチベットのほうに行ったんです。最初に説明会に。でも最初のうちから分裂したんですけど。

あの、日の丸を掲げてはいけないって始まったので、日本で日の丸を掲げたら何でダメなんだ、そしたらまだまだ国民は日の丸を掲げるのを見ると右翼だと思って拒否反応を示すから、掲げない。じゃあいつになったら掲げることができるようになるのか、と。それほど継続的にお前らはやるつもりなのか、と言ったらそういうつもりもさらさらないみたいだし。じゃあ彼らの言う国民が納得し始めたら掲げましょうという論理は、まったく逆で、最初は拒否反応を示すかもしれないけど、国旗を掲げ続けることによって普通になっていくほうが順序としては正しいということで分裂したんです。

そのときに、在特会の桜井君というのも来るらしくて。フリーチベットで胡錦濤の弾圧問題を取り上げろっていうデモをやるらしい。ちょっと手伝ってくれないかと。人集めもそうだし、てこ入れしてもらいたいということになって、そこで多分初めて桜井君と会ったんだと思います。その時に初めて在特会ってのがあったって。

《在特会での活動》

で、「動画にいっぱいあるから見たほうがいいよ」みたいな話になって。面倒くさいけど見るかって、そしたらああこんなことやってんだって。でも地元の在特会って、1 年に 1 回の飲み会やる程度で、活動ってものはなかったし、会の体をなしていなかった。これ、「桜井君ががんがんやってるんだから、支部あるんならやんなきゃだめでしょ」っていう話になって。やる人がいないんで、「じゃあ何か僭越ながら、街頭演説会のやり方とか、ちょっとやってみるかい？」みたいな。そこから当時の支部長にマイクを持たせて、最初は 5 分くらいしかしゃべらなかつたんですけど。街宣ってこうやってやるんだってよってひな型をそこで作って、徐々に作って行って動画配信すると、段々支部にも人が。

在日特権という運動は新風時代もずっとやってなかったけど、いやあ、改めていわれたら問題だなという話になって。ただ、桜井君は「これはプロパガンダ」って俺はずっと思ってたんですよ。

あの、多数の会員を集めるためのプロパガンダとしてやるためには、誰もがわかりやすい問題を特化することなんです。全体的にやると人は集まらないんで。特化してやる。これプロパガンダ。動画配信も、最近大人しいんですけど、がんがんけんかやったり、こっちからふっかけていたり、ハプニングをわざと作るっていうような手法だったんですよ。これもプロパガンダだって思って、そうすると桜井君のやり方ってのは当時マッチしたんだろうね。急速に会員がこう増えていって、そこで「こういうやり方もあるんだな」っていうことを教えてもらったよ、桜井君に。だからこれはしばらくは、形になるまではね、会員数がある程度増えるまでは、一緒にやってみようかなと。

で、多分1万人になったらというのは最近知ったんだけど、多分ある程度の会員を抱えると思想的な問題というのが出てきて、その問題突破すると思想性がなくても参加できる人が集まるんですよ。だから、恐らくいずれは思想性を持たせるための作業が必要になってくるだろうと思ったんで、現実にいるんな人と会うときに思想の話をするようになったんです。運動って思想持たなかったら絶対に空中分解するよって。桜井君は絶対そのうち会員増えたら思想性を持たせるための展開するからという話をしてたんだけど、去年くらいから思想展開をする。

民族派の知り合い連中からは「在特会と組んではたらダメだよ、あんな思想も何もないものと一緒にやったらダメだ」。その時僕は思っていて、いやいやいや、じゃあその運動に特化したものにしか食いついてこない、思想も何もない連中が思想を持ち始めた時に、右翼民族派が彼らに対して何て文句言うんだ。という疑問から段々と応援するようになった。

(役員になることは)断ってるんですよ。誰でも会員になれるし、ポツってやれば(クリックすれば)会員になれるから、それを拒む理由もないだろうってポツって(クリックして)会員になったんですけど。でもあくまでもその当初は××会をやっていたし、もちろんそれをやめてからは△△(別組織)を作ることになったんで。会員募集してないから団体とは言わないかもしれないけど、「△△ってあるんで(在特会の)会員だけ別だよ、運営には関わらないよ」と。サミットの

デモの後だと思えます、会員になったのは。それは別に大した決意とかじゃなくて、「ああなんだポツってやったらなれるんだ」っていうノリですよ。

でも、本当はあくまでも在特会が体をなしてなかったから一緒にやっただけで、形になったら俺は違うことをやりたい。今やっている在特会の活動は僕がやりたいと思ってる活動ではないので、運営にも入らないし。要するにいつでも抜かれる状態。活動から離れられる状態。去年の12月で引退をしようと思ってたんですけど。それはね、支部長がものすごい能力のある人で——まああんな奴は珍しいです、それこそ英傑です——それが会を引っ張ってるから、もうなんか俺がいなくてもいいし、あんま俺がいる意味もないな、と。人も集まるようになったし。桜井君も思想性をもっと出せるような作業に入ってるし。ああ、じゃあ俺がやりたいことできるなって、今はいつ抜けるかなーと思ってる状態。

《外国人問題の位置づけ》

関心持ったのは非常に遅いんで、桜井君のお陰なんだけど、何か理論とかってそんなにいららないんですよ。「外国人参政権って必要なの？」って言われたら、そもそも必要なのか必要じゃないのかという論議する土壌にも本当はなくて。ここは日本だから、日本の政治の数とりというものは、当然日本人がしなきゃいけないし、ニセモノだけど民主主義なんだから、日本の国民が政治の行方を決める最低限の権利です。今、民主主義のなかで一般の国民が権利を行使できる、国の運営に関われるのって投票権しかないですから。だからそういう意味では論議の土壌は僕の中ではない。

でも憲法も外国人からもらってね、国の行く末を決める投票権も外国人にやって決めてもらうんかい。それは多分、日本を亡きものにする、日本を亡きものにするというよりは天皇陛下を亡き者にする。今、形の上でだけになってしまっているけど、根こそぎ亡きものにするっていうような土壌を作るためには、日本という原理に回帰させない作業が必要で、その一環として外国人参政権がある。

だから今ちょっとね、空気が変わってきているけど、本当に通りそうになっている時があったじゃないですか。民主党政権がぱっと台頭して、弱

小勢力の自民党さん。まああれだって自民党が作ったものだけさ。ああこれ通るな、とその時は思ってたんだけど、「いやいや桜井君、これ俺達なんぼがんばったって通るよ、通ったらどうするんだ。通ったら民主主義だから許すのかよ、俺は許せない」ってなったときに桜井君は同じ考えだった。それは合法的な手段として国会を取り囲むって言うたけど、ああ（人は）来ねえぞって。まだ1万人行ってなかったです。

だから論議する土壌にはないものだけでも、非常に通すとすべてが揺らぐ起爆剤になるだろうなってのは思ってたから。通ったら通ったで国民に「なんで外国人参政権ごときで命かけなきゃいけないんだ、あいつらは」っていうような場所を本当は右翼がやらなきゃいけないんだけど、そういう気概もないから。

じゃあ保守といわれ、本物の保守なんていねえんだけど、保守というものはあるから、そういう奴が出てきてもいいんじゃないかなと。とにかく思考する材料を提供するものとしては、動画という方法もあるし、ただ一番強烈なのはさっき言ったテロ容認派、テロリズムによって問題を提起してそれに乗っかる国民の数が増えればいいだけの話であって。そのためだったら、今それが法治国家で罪になるんだったら、ちゃんとそれを償うようにすればいいわけで。自決しなきゃいけないほどのテロを行った場合にはためえで腹切ってお詫びすればいいわけで。そういうところまで考えてるかなあ。

（外国人参政権は）それくらい重要だとは思っているけど、全部在特会の取り扱っているものって本質的にそうなんだけど、誰も口にできなかったが、本当は大事なのに大きな盛り上がりを見せないっていう意味では。在特会のやり方って非常に下品だとか言われてるけど、あれこそテロの気質なんです。何言われようが向かっていく。ばんばんけんか売るとかね、あれも一種のテロリズムです。インパクトを与えてという意味では。あのやり方もいろいろ民族派のとかいわれるみたいだけど、気にすることはねえよって思うし。

6. 自前の活動へ

《1人での活動》

きっかけがあって、僕の△△の顧問兼相談役が〇〇という人物です。その人は多分10年くらい

前から交流があったんだけど、その人がたまたま地元に来ることになって、ずっといろんな話をしたんです。そこで邂逅したっていうか。今までは知り合いという付き合いを——ずっと年賀状のやり取りをしてただけだったんだけど、その人の今やろうとしている活動とか思想の根本、日本人は民族派も保守も含めて左翼も右翼も関係なく日本人は何なんだと。その思想の根っここの部分に回帰する作業を、誰かがちっちゃくても始めないと、この国は本当になくなるし、なくなってもそれを語るものとか思考する者がいれば何とかなるかもしれない。

ということを2人で話していて、「〇〇君そろそろね、根っこを掘り起こす作業を一緒にやろう」と、何かまず会作らないとダメだという話になって。で、※※——※※という団体です〇〇さんのは——それを地元でやれっていったから断ったんですよ。僕は〇〇さん尊敬するし、師匠の1人であるとは思ってるけど、※※の傘下には入らない。それは〇〇さんの顔色を伺ったりとか、〇〇さんの考えはどうなんだろうといちいち気にしてたら活動なんかできねえから、〇〇の傘下には入らんよといったら自分でやれ、というので△△を作った。

《活動したいこと》

さっき〇〇と話したなかで、日本人の根っこを思考することです。結果的には右翼的になるんだけど、日本に存在する右翼思想ってのは全然右翼じゃなかったりするわけです。保守だって本当に保守なんていないし、何を保守するんだよって。やっぱりそれを全否定して、もう1回日本人の回帰するところは一体何なんだ、という活動はものすごくアプローチ的にはすごい幅があっているところあるんだけど、みんな多分笑うかもしれないけど農業って大事じゃない。日本人にとっては欠かせないものです。だけど保守を語るにほんじんのなかに本当に農業らしきものに携わっている者はいないし、まずそこをやる。

それから保守は日本の伝統文化を継承しなければいけないっていうね、守らなきゃいけない。でも保守の中に日本の伝統文化を実践してるやつはいるのかと。いないんです。ほとんどいないんです。しかも日本の伝統文化って非常に敷居が高くて、お家制度とか。そうすると、きっかけぐ

らいのものをやってもいいんじゃないかって。

たとえば僕、今空手はやってるんですけど、空手を入門しなくても空手が体験できたり。あ、俺のやりたいことを見つけたと思ったら入門すればいい。お茶ももう1回やり始めないと忘れちゃってるけど、入門しなくてもお茶ができる環境。あとは神棚を持ってるけども祝詞を上げないんですよ。神主じゃなくたって祝詞を上げていいんですよ。「でも神棚が折角あるんだから祝詞を上げようぜ」ってところから、神道の世界へ。すべてのきっかけになるものを少しずつ出していけないかなって。そういう活動をやりたいんです。

あとはこれはお金がかかるし暇がないとできないけど、英霊を守らなきゃいけない、先の戦争でお亡くなりになった先人達を顕彰しなければいけない。お参りする、それは当たり前でしょ。どうするんだと。遺骨収集できてない島がある。残砲が埋まってて今でも現地民が数名年間亡くなってる。俺達日本人の先輩が命がけで戦って残してきたものを片付けるのは日本人の仕事だろ。遺骨を収集する活動もやっていきたい。これは〇〇が毎年実践してるんですけど。ガダルカナルに行っ、残砲しょって帰ってくる。転んだら終わりです。そういうものを少しずつやっていきたいな。

だから命をかけてもいかなと思ってるんだけど、それは去年病気でぶっ倒れて死ぬとこだった。後遺症もなく、まあでも本当は俺、クソみたいな世の中に生きてるんで早く死にたいとずっと思ってたんです。神様が許してくれるんだしたら今死にてえよ。だけど、とりあえず今日を一生懸命生きないと遣り残したことがあったら死んだら後悔するから、酒の席でも一生懸命飲むし、活動も一生懸命やるみたいな、そういうのを信念としてるんだけど、死にたい。でも死ねなかったということは、神様が許してくれなかったんだと。俺は一生懸命やってきたつもりだけど、やり足りねえんだ、って思ったんです。悩んだけど。死なせてくれなかったショックで。全否定された気持だったんです。今までやってきたことは、何か全然意味をなしてないからまだやれっちゅうということかと。

で、そう思ったときに入院のときにいろいろ考えたのが、さっき言った在特会と違う、在特会というプロセスがあって、俺がやりたいことはもう

活動をやらないということで、△△の原点に戻ろうと思ったんです。

震災があつてね、すごいなんかヒントみたいなものが見えてきたような気が、すごいするんですよ。恐らくこの震災って戦争でもありえない、爆撃でもあんなに一瞬にしてわずか何十分の間に何万人ももってかれるようなことってありえないし、これは神様の鉄拳だろうよって、どう考えても。石原慎太郎が批判されてたけど、これは天罰だと。これは東北の人に対してではなく、日本人に対する天罰だから、逆に生かされている俺達は亡くなった人たちの残念な悔しい思いで死んでいった方々の魂に報いるためには、その魂が慰霊されるためには、立て直す側の日本人が日本人としての誇りと原点を取り戻す作業に入って、生きながら復興しないと、ただ復興したのでは浮かばれないだろうと思つてて。それが言葉にできなくても思っている人って結構いる、と感じるんですよ。

で、一番とっつきやすいのは——回帰する時に一番とっつきやすいのは——震災前は明治維新だったんですよ。明治大帝が近代日本国を作つてその原点に帰ろうぜっていう話はあつたけど、いやいや日本ってその前からあるだろうって話をする奴があまりいなくて。でもこの震災がきつ

けになって、日本の成り立ち、要するに^{くにう}国産みのところからはじめようという人がぼろぼろぼろ出てきてる。恐らくコレがね、日本人としての原点に回帰するヒントだから。古事記を勉強する人が急激に増えてるんですよ。

だから在特会のあり方っていうものも、桜井君が思想性を持たせ始めたら、深くなっていくんでしようね。いずれ日本人とは何だ、保守は何だっていうところにみんなが思考を持っていくような時代が来ますよ、きっと。

(少数の活動になることも) 多分それも納得済みというか。それで思想性を持たなくてつまらないと思う人はどうぞ抜けてください、という体制をとると思うんですよ。何人残るかわからないですけどね。だけど1万人の中でね、濃い連中が残ったらそれこそ本当に国になす集合体になるかもしれない。と思つてます。その中には、今だからちょっととっつかまったら大問題になるけど、それこそ行動右翼みたいな感じにする奴も

出てきますよ。それを暴発させないのが会長の仕事になってくるじゃないかなって思うんだけど。

《在特会から学んだこと》

自分の漠然として考えていたやりたいことが、明確になっていく、少しずつ明確になっていった背景には、桜井君のもってきた在日特権を許さない市民の会の動画があるんです。それによって気まぐれで街頭に出たのが、行かなきゃいけないから。去年60回やってますからね、デモを。デモと街頭演説会、抗議、全部入れて60回やってるので、1人でやったら60回もやらないですよ。せいぜい2ヶ月に1回ちょっと行ってみようかな、とかその程度だけど。活動する自分とかこうしなきゃいけないんだっていうものに、拍車をかけてくれたのは、間違いなく在特会だし、自分の思考がどんどんと明確になっていく。こういうごつごつしたのから小さく丸い状態になっていく作業をしてくれたのは、在特会の人たちとの出会いであって、活動であって。

その中には、まったく思想性のない人と話をして、20歳、21、2（歳）の人が「天皇陛下ってそんなに偉いんですか？」っていったときにすごいびっくりしたんですよ。「何でそんなこと聞くの？」でも考えてみたら、天皇陛下とはいったいどういう御存在なのかを教えてくれる親もいなければ、教育機関でも教わらない。だったら、多分日本人の20歳——その子と同じ年代の子っていうのは、圧倒的にこの子と同じ考え方でいうか、持っているんだろうな。これ大問題だろうなって思ったんですよ。

最初、鼻で笑いましたけど。「何なの」って感じだったけど、家に帰って「あいつの発言って重要、重大発言だな」って。日本全体がこういう状態になっているってことは、やっぱり根っこの部分を掘り下げていく作業に入らなきゃいけないって思ったし。それだって在特会と出会って、20歳くらいのに出会って。おっさんがそういう人と活動するってないから。そいつの発言聞かなきゃ気がつかなかった。あらゆるものを包括して在特会の活動とか、飲み会とかを通して自分も学んだ、自分で取り入れなきゃいけないものが明確になってきたというか。めっちゃめっちゃ感謝してるんですよ。

7. 結語に代えて

γ氏は他の在特会参加者と比較して特に年齢が高いわけではないが、大分異なる活動家キャリアを歩んできた。1990年代半ばに民族派の活動家たる野村秋介に影響を受け、自ら連絡して右翼活動に参加する。それ以降は、民族派の人脈を中心としていくつかの団体を渡り歩きつつ、自らも団体を設立して活動を続けてきた。氏がテロという言葉に込めるマッチョなヒロイズムは、強い男性性を自明にできないメンバーが多い在特会のそれとは異質である。そうしたキャリアを持つγ氏が在特会と出会うのは、洞爺湖サミットに合わせた反中国活動であった。民族派の一部は、確かにサミットだけでなくAPECなどにもナショナリストとして反対の動員をかけているが、民族派と在特会の出会いが「反中」であるのは興味深い。国内問題であれば、両者の接点はなかったのではないかと。

そして多くの民族派が在特会に否定的な態度を示すなかで、γ氏はそこに「プロパガンダ」を読み取って新たな動員手法を見出す。民族派が在特会の主張の中身のなさ（思想の欠如）や言葉の品のなさに反応したのに対し、γ氏は在特会が動員に成功したというノウハウを評価したといえる。現実問題として、民族派は閉鎖的なサークルの中で活動も停滞していたから、γ氏のような着眼点があっても不思議ではない。γ氏は、在特会をヘイト集団としてではなく、「思想」を持った右翼活動家を育てるインキュベーターとみなしたわけである。

γ氏が在特会での活動を通じて得たのは、そうした動員の手法だけではない。街頭に出ることを主たる活動とする在特会にあって、活動することで自らの思考が明確になるという効果もあった。民族派の活動では、相互に理解が行き届いた集団での付き合いになるから、不特定多数に訴える在特会とは自ずと性格が異なる。そこでの活動は、思想を深めることにはなるだろうが、自己確認の場とはならないだろう。γ氏は、活動のノウハウを提供するといった手助けから始めたのが、在特会の行動主義に引っ張られる形で自己確認を進めていったといえる。

最後に、在特会に集う若者の多くは右翼思想を身につけているわけではない。そこでの付き合いを通じて、日本の一般的な状況を知って自らの活

動を立て直していく。実際、γ氏は若年層を集める形で自宅を開放し、余暇活動の機会も提供している。在特会自体は、組織内部でのトラブルが増加して衰退過程に入っており、その手法が飽きられて一般参加者が減少すれば、やがて自然に消滅する可能性が高い。だが、仮に在特会が解体を免れないとして、在特会を経験した若年層がγ氏の期待したような「成長」を遂げていくのか。民族派の一部から排外主義を訴える活動家が生まれ、それが在特会の基盤となったことは別稿で述べた。在特会は、それから別の右派活動を生み出すようなものとなりえるのか、あるいは単なる麻疹のように排外主義など忘れてしまうのか。γ氏の経験は、現時点では論点になっていない「ポスト在特会」の排外主義運動というテーマにつながっている。

文献

- Berezin, Mabel, 2007, "Revisiting the French National Front: The Ontology of a Political Mood," *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 129-146.
- Blee, Kathleen M., 2002, *Inside Organized Racism: Women in the Hate Movement*, Berkeley: University of California Press.
- , 2007, "Ethnographies of the Far Right," *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 119-128.
- Kimmel, Michael, 2007, "Racism as Adolescent Male Rite of Passage: Ex-Nazis in Scandinavia," *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 202-218.
- Klandermans, Bert and Nonna Mayer eds., 2006, *Extreme Right Activists in Europe: Through the Magnifying Glass*, London: Routledge.
- Linden, Annette and Bert Klandermans, 2007, "Revolutionaries, Wanderers, Converts, and Compliers: Life Histories of Extreme Right Activists," *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 184-200.
- 小熊英二・上野陽子, 2003, 『<癒し>のナショナリズム——草の根保守運動の実証研究』慶應義塾大学出版会。
- Schgal, Meera, 2007, "Manufacturing a Feminized Siege Mentality: Hindu Nationalist Paramilitary Camps for Women in India," *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 165-183.
- Virchow, Fabian, 2007, "Performance, Emotion, and Ideology: On the Creation of 'Collectives of Emotion' and Worldview in the Contemporary German Far Right," *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 147-164.
- 安田浩一, 2010, 「在特会の正体」『G2』6: 76-105.
- , 2011, 「ネット右翼にたいする宣戦布告」『G2』7: 270-295.

(付記) 本稿は科学研究費補助金による研究成果であり、稲葉奈々子、申瑛榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。